

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻  
日本・東アジア文化学領域  
渡邊 朝美

【論文題目】  
蘇曼殊研究—小説作品を中心に

【授与する学位の種類】 博士（文学）

#### 【論文審査の結果の要旨】

蘇曼殊（1884-1918）は、清朝末期から中華民国初期にかけて活躍した文学者であるが、これまでの研究では、彼が中国人の父と日本人の母との間に生まれ、日本・中国・南洋を行き来するうちに若くして世を去ったという、その数奇な生涯に関心が集まりがちであり、彼の残した文学作品についての緻密で実証的な研究はほとんどなされてきてはいない。渡邊朝美氏の学位論文「蘇曼殊研究—小説作品を中心に」は、こうした蘇曼殊研究の空白を埋めようとする意欲的な研究である。

「はじめに」において、これまでの蘇曼殊評価についてまず概観したうえで、渡邊氏が本論文において明らかにしたいと考えている問題が何かということを明示している。それは、これまで蘇曼殊は近代文学への移行期における「古典文学の殿軍」として中国文学史上に位置づけられがちであったのに対して、むしろ「近代文学の先駆」であることを実証することである。

第一章では、蘇曼殊の代表作である「断鴻零雁記」を取り上げ、本作品がバイロンや小デュマの影響を受けているとの先行研究の指摘を踏まえた上で、更に一步踏み込み、日中の狭間で生きる混血児として暮らす蘇曼殊自身の内面の葛藤を、小説化することによって昇華しようとした作品として再評価している。

第二章では、未完に終わった「天涯紅涙記」を取り上げ、この作品に示された蘇曼殊の中国革命に対する思いが、第四章で取り上げる「焚剣記」に引き継がれていることを示している。

第三章では、「絳紗記」に見られる西洋小説の影響、具体的には、小デュマの「椿姫」やオスカー・ワイルドの「サロメ」の影響について明らかにしている。また、中国の古典恋愛小説が「大団円」の結末を迎えるのが大多数であるのに対して、本作品は、報われることのない、死をも超越した恋を描いた新しいタイプの恋愛小説であると主張している。

第四章は、「焚剣記」の人物形象設定の背後にイプセンの影響を読み取り、中国知識人にイプセンがどのように受容されてきたのかを丹念に調査したうえで、「焚剣記」の女性主人公は「人形の家」のノラに重なる新しい女性像の創造であったと論じている。

第五章では、「碎簪記」が、無償の愛を貫く男女の悲劇を描いた作品であったことを明らかにし、古典小説のスタイルの中に西洋文学に描かれた男女の愛を取り入れていると主張している。

第六章は、蘇曼殊最後の作品である「非夢記」を取り上げ、本作品が、中国恋愛小説の代表作である『紅樓夢』の三角恋愛の枠組みを踏襲しながらも、シェイクスピアの「から騒ぎ」や「オセロー」の人物設定の影響を受けた新たな恋愛小説創作の試みであったと論じている。

「結び」で渡邊氏は、立論全体を総括するとともに、蘇曼殊が口語ではなく文語で小説を創作したのは、時代的制約に加えて、簡潔な文語表現への強い拘りが彼にあったためではないかとの推論を加えている。

これまで日本ではほとんど分析されたことのない作品を含め、蘇曼殊の全小説作品を丹念に読み込むとともに、彼の雑記・書簡類にも広く目配りし、それらの中に書き残された蘇曼殊の西洋文学への言及を手がかりにしながら、その作品と西洋文学との関係について詳細な分析を加えたことは、高く評価することができる。渡邊氏の本論文は、古典文学と近代文学をつなぐ先駆者としての蘇曼殊像が浮かび上がる説得力のある論文に仕上がっており、学位論文として適格であると評価することができる。

る。

#### 【最終試験の結果の要旨】

本審査委員会は、渡邊朝美氏から提出された学位論文「蘇曼殊研究——小説作品を中心に」について、平成25年1月18日午前11時から12時過ぎまで、1時間余りにわたって最終試験を実施致しました。

最終試験においては、はじめに渡邊朝美氏から学位論文の概要について説明があり、それに引き続き審査委員との間で質疑応答が行われました。論文の構成のあり方、先行研究との関係、研究史における本論文の位置づけ等々について質疑がおこなわれ、渡邊朝美氏はいずれの質問に対しても適切な応答をおこないました。

さらに、1月27日、E205教室において学位論文公開発表会が開催され、渡邊朝美氏による論文要旨の発表と質疑応答が午後2時から3時までおこなわれました。本研究の学術的な意義や同時代のほかの作家との相違、蘇曼殊における人生の転換点等について会場から質問があり、これらに対して渡邊朝美氏は的確に回答をおこないました。

以上の結果を踏まえ、本審査委員会は全員一致して、渡邊朝美氏が博士の学位にふさわしい学識を備えていると判断致しました。

#### 【審査委員会】

主査 吉川 榮一  
委員 千島 英一  
委員 森 正人  
委員 屋敷 信晴  
委員 葉 陵陵